



TOKYO ROPPONGI ROTARY CLUB

東京六本木ロータリークラブ



『夢をかたちに』

～Make Dreams Real～
国際ロータリークラブ会長

発行日 2008年11月17日

No. 15

『エンジョイ ロータリー』

～Enjoy Rotary～

東京六本木ロータリークラブ会長

WEEKLY REPORT

平成20年10月20日

卓話『生き方雑記帖』

作家

山本 一力 様

人の縁(えにし)というのは本当に不思議なものです。何年か前、当時帝国ホテルの副社長だった小林哲也さんと食事を一緒にしたとき、「小人は縁に気づかず、中人は縁を生かせず、大人は袖すりあうも縁とする。」という言葉を伺い、感銘を覚えました。私は、今日、皆さんの前で大事な縁の話を2つさしていただこうと思います。

最初の大事な縁は、私が高知から出てきて新聞配達を始めた昭和37年の話です。私は中学3年生。朝4時に専売所へトラックが運んできたのを封を切って、それを私は400部配っておりました。配達していたのは渋谷区の大山町と西原。1戸の家が300坪、400坪という屋敷町のど真ん中に焼き場があつて、そこにも配ってました。日曜日に集金に行くとおかみさんが出てきて、これ飲みなさいっていただいたのが一杯のココアでした。あつたかいココア。生まれて初めて飲んだんです。自分の中でココアはものすごく特別な飲物です。冬が深まって12月25日、お屋敷の名前は芦原さんとおっしゃいました。その家のポストに新聞をコトンと入れたら同時にドアが開いて奥さんが出てこられて「クリスマスおめでとう」ってプレゼントいただきました。本当にびっくりしました。濃いブルーの銀座松屋の包装紙で赤いリボンが付いてました。配達を終えて帰ってリボンを解いて、出てきたのは靴下とロータリークラブのカードでした。中3の小僧ですからロータリークラブが何であるか知りません。でも生まれて初めての体験。こんな嬉しいことはなかった。2年目のクリスマスの朝も、またプレゼントをくださいました。4年続いたんですそれが。随分後になって直木賞をういて講演をするとき、そのことを思い出したんです。あの4年間、芦原さんは12月25日の朝、コトンっていう音が立つのを寒いドアの内側で待っておいでになった。全く見返りを期待しない本当の奉仕。私はそのときまですっかり忘れてました。芦原さんに何のご恩返しもできないままです。その後、お宅が在った場所を尋ねたんですが、マンションになっていて探しようがありません。

2つ目は、今日、お話をする機会を作ってくださった浅田さんです。4年前、高知新聞100周年の年、郷土の先輩作家の宮尾登美子さんとの対談の打ち合わせで高知新聞が席を設けたんです。味の分かって

いる土佐料理より金沢の料理をということで、浅田さんところで席を設けていただいた。そのとき浅田屋の女将から浅田屋さんは加賀藩の飛脚宿をやっていたと伺ったんです。飛脚が北国街道を7日で結んだの、冬場でも10日で走ったのという話を聞いてすごいと思い、金沢の浅田屋さんにも伺い、いろんな資料を読んで、かんじき飛脚という小説が誕生しました。あのとき高知新聞が場を設けてくれたんで、大事な話を聞かしてもらった。そういう形で縁が積み重なって新しい縁ができるいく。こういうものは一朝一夕にできるものでは絶対にありません。

今、世の中がいろんなことで揉め、経済もめちゃくちゃです。学者や評論家は難しいことをおっしゃる。でも、そういうこと全部引っこ抜いて、根っこをバッと見たとき出てくるのは、「俺が」という一人称の生き方が強く出ているが故に起きる現象だと思います。小説でいうところの一人称、一視点というやり方は作者の目と同じように読者がたどって行きますから、作者に見えていないことは読者にも見えない。これは我々が今生きているやり方です。対する三人称、多視点は物事を神の目線で見て、起きている物語を同時並行的に描く。高い位置から全体を俯瞰することになります。三人称、多視点で物事を見ていくれば「俺が俺が」がなくて、今、何が一番大事なのかが見える。そういうことを小説を書いていて強く思います。

私はロータリークラブに深い恩義を覚えています。あの真冬のクリスマスプレゼントの思いは一生消えません。人のために何かするということ、自分という主語を消して物事をなすことを、芦原さんは40年も前に教えてくれました。その素晴らしいロータリークラブのこの六本木の会の4年目という節目に、招いていただけたことは私の誇りです。この皆さんとの縁を大事にしながら、今日もこれから帰って、ひたすら小説を書きます。ありがとうございました。

